2023年6月25日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

大きな神、広い信仰

［ローマの信徒への手紙15章22～33節］

こういうわけで、あなたがたのところに何度も行こうと思いながら、妨げられてきました。しかし今は、もうこの地方に働く場所がなく、その上、何年も前からあなたがたのところに行きたいと切望していたので、イスパニアに行くとき、訪ねたいと思います。途中であなたがたに会い、まず、しばらくの間でも、あなたがたと共にいる喜びを味わってから、イスパニアへ向けて送り出してもらいたいのです。しかし今は、聖なる者たちに仕えるためにエルサレムへ行きます。マケドニア州とアカイア州の人々が、エルサレムの聖なる者たちの中の貧しい人々を援助することに喜んで同意したからです。彼らは喜んで同意しましたが、実はそうする義務もあるのです。異邦人はその人たちの霊的なものにあずかったのですから、肉のもので彼らを助ける義務があります。それで、わたしはこのことを済ませてから、つまり、募金の成果を確実に手渡した後、あなたがたのところを経てイスパニアに行きます。そのときには、キリストの祝福をあふれるほど持って、あなたがたのところに行くことになると思っています。兄弟たち、わたしたちの主イエス・キリストによって、また、“霊”が与えてくださる愛によってお願いします。どうか、わたしのために、わたしと一緒に神に熱心に祈ってください、わたしがユダヤにいる不信の者たちから守られ、エルサレムに対するわたしの奉仕が聖なる者たちに歓迎されるように、こうして、神の御心によって喜びのうちにそちらへ行き、あなたがたのもとで憩うことができるように。平和の源である神があなたがた一同と共におられるように、アーメン。

[1] 「信仰」の大きい、小さいではなく

もし「あなたの信仰は大きいですか、小さいですか」と聞かれたら皆さんは何とお答えになりますか？「はい、私の信仰は大きいです」という人は恐らく多くはないと思います。謙遜で「いや、私の信仰なぞ小さなもので…」とおっしゃるでしょうか？でも、そもそも信仰に「大きい・小さい」なんてあるのでしょうか？

まあ、大胆な信仰、というものはあるかもしれませんけれども。ただ、信仰は「大小」よりも「あるかないか」ではないかなと思います。ただ、信仰の大小はないとしても、これはあるかもしれないと思うのが、「広い信仰・狭い信仰」です。

今日の聖書の箇所である「ローマの信徒への手紙」を書いた使徒パウロという人は、「狭い信仰」から「広い信仰」に変えられた人ではないかと思います。「熱心な信仰者」である点においては彼がイエス・キリストと出会う前も出会った後も同じ、と言えるかもしれませんけれども、イエス・キリストに捕らえられてからは、彼は「広い信仰」を与えられたのだと思います。「広い信仰」とは一言で言ったら何といえるでしょうか。私は、それは「自分の思いにこだわらない信仰」「常に聖霊に導かれる信仰」だと思います。

　パウロは、皆さんご存じのように、ユダヤ人の熱心な律法学者（つまり信仰者）である自分を何よりも誇りとしている人でした。自分は神様のおメガネにかなう人物だと思っていたでしょうね。プライドの塊、上昇志向の生き方で、律法を守れない・守らない人は、異邦人と同じ、神様から見離されている者だと、人を裁きながら思っていたことでしょう。ところが、彼は変えられました。自分自身で変わった訳ではありません。思いがけずイエス・キリストと衝突することによってです。上からの光に打たれ、一時な盲目になり、嫌悪していたイエス・キリストのみ声を聴いたのです。「わたしはあなたが迫害しているイエスである。町に入れ」（使徒9:5）と。ある意味神様のなさることは優しくはありませんね。しかし、そこで神様がなさったことは、赦し、そして新生パウロに、新しい生き方を与えたことです。パウロはこれまで握りしめていたもの（そして多分それは彼にとっても重荷だったもの）を、神様の力によって手放すことが出来たのです。これは主の聖霊の出来事です。それは彼を真に自由にしました。

[2] 祈る人・祭司として

　パウロは、「ただイエス・キリストに自分を委ねる」ことが救いであることを自らが体験し、もはやユダヤ人や異邦人の区別はないことに確信を持ち、それを当時の自分が行ける範囲内の場所に行っては伝道し、いくつもの町に教会（主の共同体）を作りました。そのパウロたちの伝道のおかげと言いますか、その延長線上に、どの民族であろうが、神様の大きな恵みの中で、今私たちも主の共同体の一員とされているのです。そして、パウロが素晴らしいなぁと思うことは、彼はそのようにして生まれた教会について―まだ実際に足を運んだことのない教会に対しても―いつも覚えて真剣に祈っていた、ということです。それが分かるのが、読んで頂いたその直前の15章14節以下です。そこも朗読させて頂きます。

　「兄弟たち、あなたがた自身は善意に満ち、あらゆる知識で満たされ、互いに戒め合うことができると、このわたしは確信しています。記憶を新たにしてもらおうと、この手紙ではところどころかなり思い切って書きました。それは、わたしが神から恵みをいただいて、異邦人のためにキリスト・イエスに仕える者となり、神の福音のために祭司の役を務めているからです。そしてそれは、異邦人が、聖霊によって聖なるものとされた、神に喜ばれる供え物となるためにほかなりません。そこでわたしは、神のために働くことをキリスト・イエスによって誇りに思っています。キリストがわたしを通して働かれたこと以外は、あえて何も申しません。キリストは異邦人を神に従わせるために、わたしの言葉と行いを通して、また、しるしや奇跡の力、神の霊の力によって働かれました。こうしてわたしは、エルサレムからイリリコン州まで巡って、キリストの福音をあまねく宣べ伝えました。」

　ここでパウロは自らを「祭司の役」と言っています。「祭司」とは、「祈る人」「執成す人」です。パウロ自身も「祈り」によって変えられ、導かれた人です。そのようにしてキリストの共同体は、「祈りの共同体」として、この地上では他にはない、会社でも趣味のサークルでもない、「世にはなき交わり」の場所を確保し続けていくのだと思います。パウロは「ローマの信徒への手紙」を結ぶにあたって、出来上がった「教会」、主が作られた群れのことが頭から離れなかったのです。

　15章22節以下では、彼はさらにイスパニア（スペイン）にまで行きたいのだと言い、その際にローマの教会を訪ね、しばし、主に結ばれているという「共にいる喜び」を味わいたいと言っています。しかし、それと共に彼は大事なことを言っていると思います。私はその前にエルサレムに行って、集めてきた献金を渡しに行くのだ。これは、彼が彼の出身であるユダヤ人教会に対しての思いもまた深いものがあったということの証です。しかし彼はこのことでローマの教会の人々に是非祈って欲しいのだ、と言っています。31節。「わたしがユダヤにいる不信の者たちから守られ、エルサレムに対する私の奉仕が聖なる者たちに歓迎されるように」と。実はパウロにとってエルサレムに行くということは危険なことなのですね。殺されかかったこともあるのです。何しろ彼は偏狭なユダヤ人から見るととんでもない裏切者なのですから。それでもエルサレムに行くのだと。そこで奮闘している教会を支えたい。献金を渡したい。その後、あなた方の所に行くと。

　これはもう、彼がキリストに捕らえられていること以外、説明がつかないことだと思います。彼は「異邦人の使徒」として、もう同胞ユダヤ人のことは切り離して進んでいくことだった出来たでしょう。しかし彼の中には同胞の救いに対する深い祈りがありました。ローマ9章2～3節にこうあります。「わたしには深い悲しみがあり、わたしの心には絶え間ない痛みがあります。わたし自身、兄弟たち、つまり肉による同胞のためならば、キリストから離され、神から見捨てられた者となってもよいとさえ思っています。」　ああ、伝道というのは愛なのだな、自分が救われたらそれでもう良いなどということはないのだな、と思わされます。

[3] 内弁慶の信仰になるな

さて、パウロは幾つも教会を作りましたが、また教会のことで、ずいぶん苦労をした人だと思います。そしてたくさん非難中傷もされました。しかし、そのことが彼に伝道することをやめさせる理由にはならず、そういう中にも主を信じる人々が起こされ、救われた一人びとりが16節にあるような、献身的な「神に喜ばれる供え物」となっていく現実に心燃やされて行ったのだと思います。そして大事なことは、これは彼一人の伝道の働きではないということです。最後の章の16章には、プリスカとアキラはじめ、共に労苦した人々の名前が沢山載っています。「教会」というのはこれだなと思いました。今日の所でもパウロは、ローマの教会の人々に祈り願っていますよね。30節。「兄弟たち、わたしたちの主イエス・キリストによって、また、“霊”が与えてくださる愛によってお願いします。どうか、わたしのために、わたしと一緒に神に熱心に祈ってください。」これは、他の聖書の訳では「わたしのために祈り、わたしと一緒に戦ってください」となっていました。

「教会」は、安らぐ場でもあるとともに、教会員である私たちは戦うことが求められているのです。それは大きな愛を持っている神様が、一人も滅びないようにとイエス様を遣わして下さったように、今日も私たちの思いを超えて教会を通して働いて下さっているからです。今、“コロナ前”に戻るのは時間がかかると思います。でもそのために共に祈り、奉仕しましょう。励まし合いましょう。健康的にご無理がない限り、ここで礼拝を守りましょう。そして、教会員同士愛し合いましょう。私自身、祈りも奉仕も不十分であったことを思わされています。私が、十分に今後「福音のための祭司」となってゆくことが出来るよう、ぜひお祈り下さい。私も皆さんのために毎日祈ります。川越教会は、開かれた教会になりたい。教会は、限られた人の頑張りでは続きませんし、或いは牧師が突出してもいけないのです。「チーム」です。互いが支え合い、失敗しても前を向いてゆくチームです。この世の戦いは険しいかもしれませんが、だからこそ主は教会をお建て下さったのだと思います。狭い信仰、内弁慶になることなく、開かれた信仰をもって、ご一緒に神様の導きに従ってゆきたいと思います。お祈り致します。

主イエス・キリストの父なる神様、あなたの御名を讃えます。「ローマの信徒への手紙」をこれまで読み、大きな励まし、またチャレンジを頂いたように思います。私たちが、ただキリストの大きな恵みに押し出されて、あなたをこの身で証しし、また信仰共同体のチームとして証していくことが出来ますように。どうか、狭い信仰ではなく、広い信仰、すべての人を救いに導くあなたの大きな愛がこの世にあることを思い、あなたの勝利を信じてご一緒に労苦をしていくことが出来ますように。今日ご一緒できなかった方々のことを覚えます。私たちのこの教会を祝福し、導いて下さい。主イエスの御名によって祈ります。アーメン。